

## 吹田市新芦屋古墳出土の馬具

著者	藤原 学
雑誌名	阡陵：関西大学考古学等資料室彙報
巻	18
ページ	8-9
発行年	1988-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00024288">http://hdl.handle.net/10112/00024288</a>

# 吹田市新芦屋古墳出土の馬具

藤 原 学

関西大学考古学等資料室の第1展示室に、吹田市新芦屋古墳出土の鉄地金銅張馬具一式が展示されている。この資料は吹田市教育委員会から寄託されているもので、常時展示され、博物館学関係講座受講生や、学内関係者に公開されている。

この馬具を出土した新芦屋古墳は吹田市新芦屋上にあり、昭和53年11月に工事中に発見され半ば破壊された状態で、吹田市教育委員会の発掘調査が開始され、実態が明らかになった古墳である。

古墳の構造は外形規模については不明であったが、内部構造は後期古墳のなかでも多々論議されている木室墳と呼ばれているもので、しかも凝灰岩製の組合わせ式石棺が埋納されていた。西日本中心に発見されている約40例の木室墳のなかでも、石棺による埋葬例はほかにない。

発掘調査によって、この木室は2室の構造をもつことが判明し、その前室には左右2個所に須恵器と土師器の供献があり、これらは原位置のまま検出された。さらに、木室から墓道に至る間には角柱2本による閉塞施設があったが、木室墳の閉塞施設としては、横穴式石室と同様に石礫によるものが通常であり、この点も珍しい。

木室を主体とする古墳において、常に論議されるのが、火を受けているかどうかの点であるが、本墳の場合は、木室の構築に粘土は使用されず、また火を受けた痕跡はない。北方に所在する茨木市上寺山古墳は、ほぼ同規模の平面プランを有し、本墳との関連が考慮されるものの、焼かれた痕跡が明らかであり、本墳とは対称的である。

このように、新芦屋古墳は木室構造・石棺施設・供献土器群・閉塞施設など、多くの点において新しい所見があり、後期後半の古墳を考える上



馬具出土状態

において、いくつかの問題を提起したのは間違いないだろう。

古墳発掘調査の最終段階において、調査員をびっくりさせたのは、ここに展示してある馬具一式の出土であった。この馬具は、検出された木室の奥側、石棺埋葬部の棺側から出土した。石棺は全体を粘土によって被覆され、この被覆粘土の撤去は、調査の最終段階に行われたため、この段階まで、馬具の検出は予想できなかった。

馬具は棺側板と墓室側壁との僅か70cmほどの間におかれていた。鞍金具は棺の手前に近い個所に、杏葉・雲珠など飾り金具類は奥の方で検出されているので、鞍を手前に、奥には面繫・胸繫・尻繫などの各部を纏めて安置したとみられる。ただ鐙のみはこの部分から全く検出されておらず、さらに奥に配置してあったが、発掘調査前に破壊された折に、失われてしまったと考えられる。

この馬具の特徴は、極めて遺存状態が良好なことである。通例の横穴式石室の場合、石室内が早い段階に土砂で埋没しない限り、副葬された馬具は、長い期間にわたって石室内の空間に曝されて腐食が進行する。横穴式石室で検出される馬具は遺存状態が極めて悪いのが通例である。しかし、この古墳の場合、副葬後直ちに粘土によって被覆されていたことが幸いして、馬具が空気中に曝されることがなく、このような良好な状態で保存されていたとみられる。このことは先に述べた検出状態が、副葬された時の状態に近いものであることを示しているとみられる。杏葉、辻金具等の検出に際して、この折り重なった金具類の間には、薄灰色の海绵状の物質が遺存していたことが



古墳主体部全景

指摘されており、これらは胸繫等の革帯の痕跡であったとみられ、もし現在の調査であれば、馬具検出部分はそのままの状態で切り取り、移設される等の処置がとられたであろう。この検出状態は、馬具の出土例としては希にみる資料であったことは間違いない。

検出された馬具は、鑑以外はすべて一式揃っており、鞍金具（前輪・後輪各2枚と鞍縁金具など）、轡・引手・鏡板2枚、辻金具7、杏葉5、雲珠1、絞具2その他残片である。これら各金具配置の復元は難しいが、雲珠に付された6本の脚のうち、3本に杏葉が付されるとみられるから、残り2点の杏葉が胸繫に配置されていたとみられる。胸繫に2点の杏葉あるいは馬鈴を付す例は、埴輪飾り馬にもあり、この想定を裏付けている。なお、前室からも磯金具2が出土しており、これには鑑金具の残欠が伴うので、本古墳にはほかにもう一つの馬具があったとみられる。

鏡板、杏葉、雲珠などの飾り金具は、製作手法が統一されており、鏡板は十字文の飾りを持ち、杏葉は三葉文をもつ楕円形のもの。いずれも、鉄地の本体に紋様を切り出した飾り板を張り、銅の薄箔を張って鍍金したもので、これらの接合に使用した鋳には、鋳頭に銀の箔をまいてある。従って外見的には金の本体に銀の鋳を使用した、金銀の意匠をこらした飾り金具とみえる。ただ、磯金具の金の剥離が、ほかの金具とは様相が異なり、鞍金具については、製作工程に違いがあるかもしれない。いずれにしても、遺存状態の良い馬具資料として、製作工程の復元には恰好の資料であ

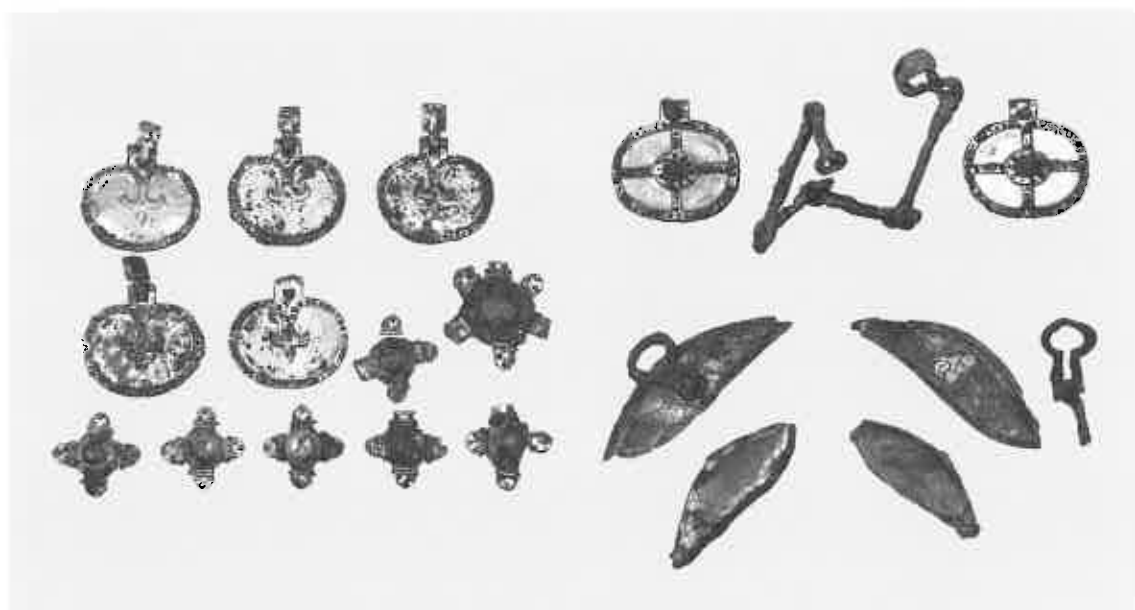
り、関西大学工学部の亀井清教授の御協力を得て、調査を進めていただいている。

日本書紀の推古16年紀には、唐の客を迎えるのに「飾馬75匹」を出して迎えたとあり、同18年紀にも「莊馬」を出して任那・新羅の客を迎えるとある。天武10年にある「装束せる鞍馬（かざりうま）」を検校したのも新羅の客を迎えるためであった。外国の客を迎えるという重要な外交儀礼の場には、必ず必要なものとして飾馬があり、それには荘厳な金銀の馬具が使用されていたことが明らかである。この推古紀に至って現れてくるこのような記載によって、7世紀初頭の当時の施政者の外交姿勢をよみとることができるが、その端的な表現が、冠位制度の整備でもあり、その一端をこれら馬具は担っていた可能性がある。

7世紀の馬具は古墳出土例としては少くなるが、このような観点からも評価する必要がある。

本古墳は7世紀の第2四半期の初めの頃に造営されたと考えられている。

この古墳の築造年代は副葬された須恵器、供献された須恵器の双方の比較検討から導き出されたものであるが、馬具は棺側部に寄りそうように置かれており、被葬者の生前の持物であったとみられる。この馬具に共伴する須恵器は、もう少し古い年代を示しており、この馬具もそのような年代が与えられるとみられる。



新芦屋古墳出土馬具